

令和 5 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
総合型選抜 (第 2 回)

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題

次の文章は、劇作家である平田オリザさんが、コロナ禍における日本人の心の在り方について述べたものです。平田さんの意見を要約し、それに対するあなたの考えを600字以内で述べなさい。

コロナ禍に見舞われたこの数年、演劇や音楽などのライブエンターテインメント業界が受けた打撃は非常に大きなものでした。

私も、他の劇作家たちも、演劇を絶やさないために、窮状を強く訴えてきました。しかし発言するたびにSNSなどで叩かれました。

「おまえたちの勝手だろ」

「命のほうが大事だろう」

「演劇なんて不要不急だ」

それでも私が言い続けてきたのは、「もちろん命は大事だけれど、命の次に大切なものは一人ひとり違うでしょう」「自分は違ったとしても、人の幸せについて考える力、想像力を持ってほしい」ということでした。

音楽で人生を救われた人もいるし、演劇やダンス、映画などから勇気をもらった人もいます。好きなチームのスポーツ観戦が生きがいだという人もいれば、週に一回のカラオケでストレスを発散する人もいます。

「俺はとくに演劇が好きじゃなくても、君にとって演劇は命の次に大切だというのはわかるよ」と、他人の大切にしているものに対する理解を示した人は少なかったように思います。つまりそれは、自分とは違う価値観を理解できないこと、違う価値観への想像力の欠如が露呈したということです。

二〇一一年三月、東日本大震災の後、家族や友人を失い、家や仕事を失った東北の人々が、まだ寒い三月の避難所で、肅々と列をなして救援物資を待っている様子が繰り返しテレビで放送されました。多くの人がある映像を見て深く同情し、義援金を集め、ボランティアに駆けつけました。「かわいそう」と自然に湧きあがってくる気持ちが日本人を動かしたのだと思います。

日本人はこのような心優しい民族です。「かわいそうな人」というはっきりした対象があると、他者の窮状を自分にひきつけ、同情できる。しかし、異なる価値観を持った人の行動については、理解しようとするすべし難しい。これは、長らくほぼ単一の民族、ほぼ単一の言語という幻想の中で生きてきたからです。

二〇二〇年以降のコロナによる厄災がこれまでの自然災害と違うところは、「わかりやすい弱者のいない災害」である点だと私は考えています。

特に、初期のクラスター感染が豪華客船やライブハウス、ホストクラブなどでたまたま発

生したことにより、本来は弱者であるはずの感染者さえも悪者扱いされるようになってしまった。日本で「感染は自己責任」と考える人の比率は、他国に比べて突出して高いことが指摘されています。日本は当初、感染者数も死者数も比較的抑え込んできたにもかかわらず、なぜこんなにも短期間で人心が荒廃したのでしょうか。

同情する対象がないため、自分の気持ちを向ける先がなかったことも大きく影響していると私は考えています。だから自らが弱者となり、「私だけが我慢している。なぜ他の奴らは我慢ができないのか」という思考回路に陥り、他者への攻撃に転化してしまった。

日本人は、「シンパシー (sympathy)」を持つのは得意ですが、「エンパシー (empathy)」を持つのが苦手です。

「シンパシー／同情」は、自然に湧き出てくる「かわいそう」という感情です。これに対して、「エンパシー／共感する力」は、異なる他者を理解するための、行為、態度、あるいは想像力です。

ここで挙げた例でいえば、今回のコロナのような状況において、他人が何を大切にしているか、その人の行動の背景に何があるかを想像して理解する力は、「エンパシー」にあたります。

多様化していく価値観を認めあい、ともに生きていくためには、「かわいそうだから助けてあげよう」というシンパシーではなく、「私は演劇は観ないけど、君にとって演劇が大切なことはわかる」と思える想像力、つまり、「同意」はしなくても、「共感」できるエンパシーの力が必要です。言い換えれば、なぜ他者はそのように考え、行動したかについて思いをはせることなのです。

(平田オリザ「ともに生きるための演劇」による・一部省略がある)

令和 5 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
総合型選抜 (第 6 回)

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題

次の文章は、政治学者である井上^{いのうえとしかず}寿一さんが、国際社会における日本について述べたものです。文章を読み、あとの問いに答えなさい。

日本はどんどん若年人口が減って超高齢化社会になっていく。そんな状況でも私たちが思っている以上に、世界は日本に関心があります。

たとえば日本語を学ぶ世界の人々は毎年増えています。外国の人からすれば、ひらがな、カタカナ、漢字と三つも文字がある日本語は難しいのではないかと日本人は思っているのに意外ですね。二〇一五年時点で三百五万人弱、百三十七ヵ国で日本語が学ばれています。

彼らが日本語を学ぶのは日本に関心があって、日本語でコミュニケーションをとりたいたからです。茶道や華道、能、空手、柔道など古くからの伝統や文化だけでなく、漫画やアニメ、J-POP への強い関心から日本語を学ぶ人が多くいます。

このように日本の文化に興味を持つ人がいるのは大切なことです。国が国を動かすときに使う主な力には、軍事力や政治力、あるいは経済力があります。この力を「ハードパワー」と呼ぶとしましょう。対して国を動かす際の「ソフトパワー」とは、その国の文化や芸術といった魅力です。その国が持っている魅力に惹きつけられて、友好関係をつくっていくことができます。このソフトパワーを持っていることが、これから重要になっていくのです。そのことを前提に、世界の主だった地域と日本の関係をみていきます。

いまヨーロッパは移民問題で揺れています。一九八〇年代のイギリスには、あきらかに東洋人の私がイギリス人から道を尋ねられるほどに、さまざまな肌の色の人が当たり前で生活していました。そのくらい移民に寛容でした。しかしその後、移民がイギリス人の生活を圧迫しているといわれるようになってからは、イギリスは EU 離脱、移民受け入れの抑制へと舵を切りました。

とくに福祉先進国の北欧の国々では、宗教や文化の摩擦も大きくなっています。北欧では夫婦共働きで、二人で稼いだうちの半分くらいが税金で、福祉などに使われます。そこに中東のイスラム教家族がやってきて、妻は働かずに家にいる。イスラム教では女の人は働いてはいけないからです。すると北欧の人たちは「自分たちは倍稼いで多額の税金を払っているのに、隣の家はうちと同じレベルの福祉を受けている」と移民に対する不満が大きくなっています。

このような文化摩擦は日本とはまったく無縁な問題なのか。そうではありません。すでに日本にも多くの外国人労働者がいます。人手不足を補うために、低賃金かつ過酷な労働環境で働く外国人労働者はこれからもっと増えると考えられていますから、いずれ日本もヨーロッパで起きている宗教的、文化的な摩擦に直面するでしょう。そういうことを考えていかなければならないのです。(中略)

日本は歴史的にみて非西洋世界にある国です。しかしそのなかで最初に近代化に成功し、西洋の国々と価値観を共有している非常にユニークな国でもあります。いまや国際社会において民主主義という価値は自明とは思われなくなりました。「民主主義は後回しでいいから手っ取り早く経済的に豊かになりたい」という国もあります。そういうなかにあって日本は、自由、民主主義、法の支配という価値を大事にしつつ近代化をしていますが、そのことを他の国々にメッセージとして伝えることができるのではないのでしょうか。

だからこそ「日本は先進民主主義国として国際的な責任をこれからも背負っていく」ということを世界にアピールする必要があります。その方法としては世界経済で何位かということは気にせず、ソフトパワーを持つ日本として世界から評価されることを目指していくべきではないのでしょうか。

もうひとつ、事実として日本はもう多民族国家なわけです。多民族が同じ日本という国のなかで共存していくためにはどうしたらいいのか。これは綺麗な事^{きれいなこと}ではありません。大変なことだと思います。

ある民族がある民族であるがゆえにダメだ、ということはありません。日本民族といっても立派な人もいれば犯罪者もいる。それを十把一絡げ^{じっぼひとから}にすることができないのと同じで、他民族にもさまざまな人がいる。日本はその点で、もっとヨーロッパの経験を学んだほうがいい。そういう相互理解が深まっていく必要があると思います。

このように「日本が世界の国々と同じ問題を抱えている」ということを考えると「世界の問題を解決することは、日本の問題を解決することでもあるんだ」といつも考えておいてもらえればと思います。

(井上寿一「世界は日本をどう見ているのか」による・一部省略がある)

問1 井上さんの主張を300字以内で要約しなさい。

問2 井上さんの主張に対するあなたの意見を、300字以内で述べなさい。